

# サミット会議

協働によるまちづくり

～これからの自治のかたちを考える～

[福岡県川崎町長 小田幸男]

これからの司会を担当させていただきます、川崎町の小田です。ただいま各自治体のご紹介をしましたが、50音順でそれぞれの市町の報告をさせていただきたいと思います。初めに、岡山県総社市からお願いします。

[岡山県総社市助役 國府久俱]

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました総社市助役の國府です。今回で10回目となります雪舟サミットの開催に当たりまして、川崎町長をはじめ、関係の皆さん方には大変なご尽力をいただき、このような素晴らしいサミットが開催されますことに対して心よりお祝いとお礼を申し上げる次第です。また、明日は雪舟さんが築庭されたとお聞きします藤江氏漁楽園を訪れることができるとお聞きしています。大変楽しみにしているところです。

岡山県下では、来年第60回国民体育大会が開催されます。「晴れの国おかやま大会」ということで、いまりハーサルの大会の真っ只中です。総社市においても、アテネオリンピックで大活躍をされました福原愛選手が来られまして、今日から卓球の競技が開催されています。

竹内市長がこの席に出席できないために、大変残念に思っていると申していました。このたびは市長に代わり、私から本市のご紹介をさせていただきますことを、まずお許しいただきたいと思います。

総社市の概要から入らせていただきます。本市は岡山県南に位置しており、県下2大都市の岡山市、倉敷市に隣接していることもあり、人の交流の多いまちでもあります。気候は温暖で、市内中央を流れる岡山県の三大河川の一つである高梁川に代表される豊かな自然と、吉備文化発祥の地として数多くの文化財にも恵まれています。また近年は、岡山自動車道や鉄道井原線の開通、さらには岡山空港にも近いということで、中四国のクロスポイントとしての広域拠点性も向上してきました。これらを活かした観光センターを核とした滞在型の観光、あるいは2565m<sup>2</sup>という県下最大級の面積を誇るメインアリーナを持つ新体育館「きびじアリーナ」によるスポーツ振興、また幹線道路整備など、活気あふれる快適都市を目指して整備を進めているところです。そして、今年が市制施行50周年という記念すべき節目の年でもあり、さまざまな記念事業を開催しているところです。





また、現在各地で市町村合併の取組みが進められておりますが、本市においても来年3月22日に合併の日を迎えます。総社市に隣接する山手村、清音村の1市2村による新設合併により、人口も約6万7000人の新総社市が誕生することになります。現在、新市まちづくり計画が策定されており、心豊かな生活交流都市を目指しているところです。

本市の特産品についてご紹介させていただきたいと思います。果物王国・岡山を代表するマスカット、あるいは桃、それから赤飯のもととなったと言われ、古代には神々に捧げられた赤米からつくったお酒、うどん、また工芸品としては備中神楽面などがあります。雪舟にちなんだ最中やまんじゅうもありますので、ぜひ総社市のホームページをご覧くださいと思います。

次に、本市の歴史について触れさせていただきます。総社市周辺は古代から吉備の国の中心として栄えてきました。全国有数の巨大な古墳や数千基もの古墳群が当時の繁栄をいまに伝えているところです。吉備の国は、西暦645年の大化の改新により備前、備中、備後の三国に分かれましたが、飛鳥、奈良時代には備中国府や備中国分寺、国分尼寺が置かれるなど、備中の国の中心となってきました。また、桃太郎伝説のもととなったと言われている温羅伝説が残る古代朝鮮式山城である鬼ノ城は、近年発掘調査が進み、全国から脚光を浴びているところです。最近四つの門のうち西門が整備されました。平安時代末期には備中の324社を合祀した総社宮が造営され、この門前町が市街地形成の素地となっており、市の名前の由来にもなっているところです。

本市と雪舟さんのご縁ですが、雪舟さんは皆さんご存じのとおり、本市の赤浜というところで生まれました。この地には地元の人々によって雪舟生誕の碑が建てられています。この周辺の土地、約5000m<sup>2</sup>を購入しており、雪舟生誕地公園として整備する計画です。また、雪舟さんが少年時代に修行したと言われている井山宝福寺は、絵ばかり描いて修行を少しもしない雪舟さんをこらしめようと柱に縛ったところ、涙で本物そっくりのネズミを描いて和尚さんをびっくりさせたという逸話が残っているところです。

雪舟さんにちなんだ取組みをご紹介します。総社市では、雪舟さんを顕彰する事業やイベントも数多く行われています。その中でも有名なのが、「雪舟の里総社 墨彩画公募展」です。雪舟さんは日本を代表する水墨画家でもありますが、総社市では、水墨画の枠にとらわれずに自由な発想、あるいは技法、幅広い色使いで描かれる墨彩画を公募しています。この公募展には日本各地をはじめ外国からの応募も多数あり、ワールドワイドな展開を見せています。また回を重ねるごとに集まるレベルの高い作品に、平山郁夫先生をはじめ審査員の諸先生方も期待と感嘆を隠せないところです。なお、これらの優秀な作品、雪舟大賞、あるいは審査員特別賞、特選などについては総社市文化振興財団で買い上げをして収集しています。

報告の後半は、サミット会議のテーマである「協働のまちづくり」について少しお話をさせていただきたいと思います。昨今、地方の時代と言われており、地方への関心が高まっています。地域の魅力はイコール地域に人が訪れるかどうかの大きな課題です。いまではその地の住民だけのまちづくりではなくなりました。まちは、そこに住んでいる人と同時に、そこを訪れる人の交流の場でもあります。その交流を通して、お互いに知恵と楽しさを磨いていこうということになるかと思います。そこに住んでいる人、あるいはまたそこを訪れる人、両方にとっていいまちづくり。まさに住む人、訪れる人の協働のまちづくり。そのような時代が来たように思います。

その取組み事例として、本市が行った事業を一つご紹介したいと思います。吉備路観光の拠点施設とし

て、昨年7月に国民宿舎「サンロード吉備路」がオープンしました。おかげさまで、平成15年度の国民宿舎宿泊利用率は全国第2位にランクインしています。吉備路にマッチした和風建築の建物は国道429号線バイパス沿いに建っていて、和風、洋風合わせて39の客室のほかに200人が収容できるコンベンションホール、あるいは会議室などもあります。また露天風呂やサウナを備えた温泉施設もあり、日帰りでの入浴も可能です。お手軽にご利用していただくことができます。そのほかにも、レンタサイクルを借りれば備中国分寺や作山古墳の周辺、あるいは吉備路の歴史をしのばせる名所をゆっくりと探索することができます。また、レストランでは地元や近海で獲れた新鮮な食材を使ったオリジナルメニューが楽しめ、女性客にも人気が集まっているところです。皆さん方もぜひ一度お越しいただきたいと思います。

同じ敷地内に観光案内センター、隣には国の天然記念物であるタンチョウの保護と繁殖を目的とした施設「きびじつもの里」などがあり、吉備路観光の一大拠点としての機能を果たしています。昔からタンチョウは鳳凰と並び縁起の良い、気品のあるめでたい鳥として人気を集めていますが、現在日本では北海道の東、道東に約100羽、世界的にも3000羽前後と言われており、絶滅の危機が高い鳥に指定されているようです。

また、農産物の直売所である「サン直広場ええとこそうじゃ」も今年4月に開所しました。これは地域の農家の方が丹精込めて作った新鮮で安全な農産物を皆さんにお届けしようとするものです。製作者の顔写真付きの商品PRがさらに人気を呼んでいるようです。「ええとこ」というのは岡山地方、むしろこれは備中地方と言ってもいいかと思いますが、岡山の方言で「良いところ、総社」ということです。総社は良いところですよという意味で「ええとこそうじゃ」という名前が付いているわけです。

たいへん良いことを岡山弁で「でえれえ、ええ」とか「ぼっけえ、ええ」とか言いますが、せっかくですのでこの機会をお借りして、皆さんにちょっと岡山弁をご紹介したいと思います。方言はたくさんあるわけですが、「それでは」というのを「ほんなら」とか「せえじゃあ」とか言います。「どのようにしたらいいだろうか」というのを「どげえにする」とか言います。それから「しておりますか」というのは「しょんか」とか「何をしょんなら」と言います。先ほどの張先生のお話よりちょっと理解はしていただけるかなという気がします。「大事にする」ことを「でえじにする」、「これから」は「けえから」とか、「いろいろなもの」のことを「なんやかんや」という方言があります。「でないでしょうか」ということは「じゃあねえじゃろうか」ということで、なかなか理解しづらいところもあるろうかと思います。

岡山弁も少し複雑になってきますと、「台所にある大根を出して炊いといてください」。炊くというのも方言かもしれませんが煮るという意味です。これを岡山弁で申しますと「でえどころのでえこをでえててえて」と言います。何を言っているのはさっぱり分からんと思われるかもしれませんが、「でえどころのでえこをでえててえて」と言うたいてい岡山の人には通じます。芳井町長は備後に近いから分かりにくいかもしれませんが、それから、これは実話かどうか分かりませんが、東京に住んでいる娘さんの名前がけい子さんと、けい子さんを訪ねて岡山からおじいさんが都電に乗りました。空いている席を見つけてその娘さんと呼ぶ。「けいこ、こけえけえ」ということです。都会の人が聞きますと、ニワトリが鳴いているんじゃないかと思うことがあろうかと思いますが、そういう方言は本当に難しい。しかし味があるわけです。

このように岡山地方の方言はなかなか理解しにくい、分かりにくいかもしれませんが、今日ご出席の皆さん方は賢明な方がたくさんおられると思います。これからしばらくの間は岡山弁で本市の紹介をさせていただきたいと思います。



「ほんなら、このサンロードをどねえにまちづくりに活用しよんならということについて説明をさせていただきます。せえきん体を動かすことは、特に歩くことをでえじにするようになってきたがな。歩く楽しさのあるまちがそのまちにあるかどうかは、でえじな魅力になってくると思うんじゃあ。けえからありいたり、へえから自転車ではじかにその土地の美しさ、楽しさ、せえから暮らしのちよ(知恵)を味わうでえじなじでいじゃと思うとんです。そりゃあ車で通り過ぎただけじゃ分かん。歩きながらでねえと分かんもんです。地域にええ寺があったり、温泉があったり、工房があったり、なんやかんやええもんがあって、歩きながらそういうものを楽しむことができるんが、けえからのまちづくりの魅力じゃとおめえます。お寺、散策したのちに温泉で体をくつろがせる。体も心も楽しめる。そういう体と心の両方が癒せるとけえ、人が寄ってくるんじゃあねえかなあ。このように思うわけです。岡山弁で紹介をさせていただいて張さんの二の舞になっても困りますので、元に戻らせていただきます。

先ほどご紹介をしました「サンロード吉備路」をまちづくりの事業に取り入れたことについては、まさにこのことに焦点を当てているところです。国分寺周辺の美しい風景を求めて人が訪れ、吉備路遊歩道を歩き、またサイクリングロードを自転車で走る。じかに吉備路の香りを嗅ぎ、渡る風を感じ、またそこに住む人の暮らしぶりを肌で感じていただく。そして温泉につかり体を休め、しばし吉備人になるのです。つまり旅人も、一時ではありますがその土地の住民になりたい。一瞬でもその土地の生活者としての楽しみを味わってみたいという思いを持って訪れるのではないかと考えているところです。その土地の暮らしや、命の知恵とか楽しさを求めているのではないのでしょうか。

学び、楽しみ、心を癒したいという気持ちを誰もが持ち合わせています。期待を持って相手の土地に行くわけですから、その期待に応える必要があります。そういった意味で伝説のあるまち、それだけで十分魅力のあるまちになるのではないのでしょうか。楽しくて、同時に何かためになる伝説があるというのは大きな魅力になります。それはその土地の人だけでなく、来る人にとっても楽しさと知恵を与えるからです。わが総社市は吉備路伝説のまちでもあります。桃太郎伝説の基となりました温羅伝説、仁徳天皇と黒姫との悲恋物語、そして先ほどご紹介いたしました涙でネズミの絵を描いた雪舟さんなどの数多くの伝説があります。この地を訪れること、すなわちまるで当時の吉備の国へタイムスリップをしたかのような感覚を味わえるという期待感も抱いてもらえるのではないのでしょうか。それが伝説というパールの持つ魅力なのだと思います。

また、訪れた人はいいい土産を持って帰りたいということがあります。その土地のよさはいい土産が物語るといって、そのまちの魅力を大きく左右します。また、その地域の農産物、特産品を活用しながら、その土地の名物を作っていくことが大事ではないかと思っています。わが総社市では、最近、特産品開発として「きびみどり」これは非常に糖尿病に効くようですが、ツルセンガンを利用した商品を開発しています。和菓子やうどんなどに加工した際においしいわけですし、体にもとてもよい食品といった点で、住む人、訪れる人にも喜んでいただける特産品が開発できたと喜んでるところです。

以上、わがまちのまちづくりの事業を例にお話ししてまいりましたが、まさに住む人、訪れる人の協働のまちづくりを推し進めていくことがいちばんではないかと思っています。

終わりにになりましたが、このサミットを通してサミット構成市町の交流の輪がますます深まることを祈念しますとともに、今日お集まりの皆様方の今後のご発展、そしてご健勝を心よりお祈り申し上げまして、雪舟さん生誕のまち 総社市の紹介とさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

[小田] ありがとうございます。國府助役の岡山弁を交えた報告がありました。私自身も30数年前、倉敷市の水島で暮らしたことがありますので、本当に岡山弁を懐かしく聞かせていただきました。

50音順でいきますと大分県大野町が最初でした。大変失礼いたしました。よろしく願いいたします。

[大分県大野町収入役 安東忠司]

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました大分県大野町収入役の安東です。ご挨拶を申し上げる前に、冒頭に一言お断りを申し上げておきたいと思えます。実は、川崎町で行われますこの第10回雪舟サミット会議に、大野町長の佐伯和光が以前から期待を申し上げ、参加することで日程も空けておりましたが、本町は大野郡5町2村の合併協議を現在進めている最中であり、この合併協議が大詰めを迎えており、過ぐる10月30日に最終協議項目が決定されました。本日、5町2村がこぞって臨時議会を開催し合併事項の議決を得ることに急遽なりました。どうしても町長、議長がこのサミット会議に参加することができません。3市2町の市長並びに関係者の皆さんにお断りを申し上げ、くれぐれもよろしくとの伝言です。お許しをいただきまして、私からご挨拶と説明をさせていただきたいと思えます。

本日は、ここ川崎町におきまして第10回の雪舟サミットが第19回国民文化祭、日中交流水墨画公募展の開催と併せまして、このように盛大に開催されることにつきまして心からお祝いを申し上げます。また今年は、大変な異常気象といわれる中、相次ぐ台風の襲来により日本各地に大きな被害をもたらしています。3市2町のそれぞれの被害に遭われました皆さんに対して、この場をお借りして心からお見舞いを申し上げます次第です。

本日のテーマである「協働によるまちづくり」についてお話しする前に、本町の近況について少し報告をさせていただきたいと思えます。大野町は大分県の南西部に位置し、県都大分市から40km、約1時間の距離にあります。農業を基幹産業としている中山間地の町で、少子高齢化、過疎化の対策が大きな課題です。特産品は葉たばこ、豊後牛、かんしょ、ピーマン、みそ、スイトピー、竹炭、豊のしゃも等があります。この中で特に豊のしゃも等は、3年前から、飼育する生産者が、自分たちでぜひ豊のしゃもを全国的に売り出したいということで処理場もつくり、現在県内はもちろんのこと県外にも豊のしゃもを売り出している最中です。

本町はこれまで、過疎対策の長期主要施策として高速交通社会に対応できるまちづくりを掲げ、空、道、情報の三つを基本に環境整備に力を注いでまいりました。平成19年度には地域高規格道路である中九州横断道路が大野町まで開通予定です。これが開通しますと、大分市には30分の通勤可能の距離となります。このことは、大野町に現在ある大分県空港、情報通信のケーブルテレビと高速インターネットに次いで最後に道が整備されるわけで、多種多様、高速、高度化と言われる社会ニーズに応えられるものとして大いに期待しているところです。

中九州横断道路の開通に合わせて取り組んでおりました町中心部の田中地区まちづくり事業が、現在最終段階を迎えています。この事業は、先ほど触れました中九州横断道路が開通することをにらんでインターチェンジ周辺の隣接地を開発しているもので、現在、3.8haの用地に交流拠点施設の建設や、利便性の高い商業集積地としての機能を持たせるため、諸々の計画、準備を行っているところです。

市町村合併の取組みについては、大野郡内の5町2村による合併協議会を設立しております。来年3月31日

さて、今回のテーマである「協働によるまちづくり」について少しお話をさせていただきたいと思います。近年は日常的な社会生活の中で発生するさまざまな問題や地域課題に対し、その解決を図るべく、NPOと呼ばれるボランティア活動や、町民活動による組織的な取組みがさまざまな分野で目につくようになりました。これまでは無償で奉仕をすることだけが強調されてきたボランティア活動を、人生の生きがいや社会参加への支援の機会として積極的にとらえるようになり、住民の間ではNPOを必要とするサービスを迅速で柔軟に提供する新たな社会的、経済的な主体としてとらえるようになってきました。本町においては、町の面積の70%を占める森林が保有している多面的な機能について、より多くの人々にその意義を伝えていくことを目標にNPO法人「大野町森林くらぶ」が今年度設立されました。町有林を利用して森林体験や環境学習を行うとともに、グリーンツーリズム等にも取り組み、自然の魅力を多くの人々に知ってもらいながら都市との交流を促進するものです。

また、高齢者福祉の分野においても、NPO法人「養老会」が設立されており、高齢化率41%の本町にとって、グループホーム「養老の泉」、あるいは「良ちゃんの家」など、新たな介護サービス提供の場としての一翼を担っていただいているところであります。特に福祉サービスの提供に当たっては、介護保険制度の導入により企業やNPO法人等の新規参入が見られるようになり、福祉サービスが大変身近に感じられるとともに、これまでの社会福祉法人に加えサービス競争の原理が働くことになり、利用者の選択肢が広がってきました。このようにNPO法人やボランティア団体等が果たす役割は今後ますます大きくなるものと予測され、さまざまな分野において協働してまちづくり事業に取り組むことが重要になってくると思われます。

現在進められている合併協議会の新市まちづくり計画の中でも、市民の皆さんが積極的に参加いただけるようNPO、ボランティア団体等の市民グループとの協働、競争によるまちづくりを目指しているところです。また本町は少子化の中で、ちょうど時あたかも町内の小学校5校と幼稚園の4園を平成17年3月31日をもって統合する準備を進めております。この統合後の小学校、幼稚園の跡地をいかに地域の人たちが主体となって活用し、都市の方々との交流を生んで活性化に結びつけていくか。こういったことから国に対して地域再生計画の申請を行い、本年6月21日にその認定も受けたところです。本日はこのサミット会議において、それぞれの市や町の協働まちづくりについて多くのことを学んで持ち帰りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

終わりにになりましたが、第10回雪舟サミットの開催に当たりましてご尽力いただきました開催地 川崎町及び関係者の皆さんに厚く感謝とお礼を申し上げます、大野町の近況報告とさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

[小田] 安東収入役から報告をいただきました。ありがとうございました。続いて島根県益田市からの報告をお願いします。

[島根県益田市長 牛尾郁夫]

皆さん、こんにちは。島根県益田市長の牛尾です。どうぞよろしくお願ひいたします。雪舟サミットも今回で10回目という節目に当たり、この川崎町において3市3町の関係者が一堂に会し、こうして盛大に開催されますことをまず心からお慶びを申し上げます。

さて、益田市はこの11月1日、隣接する美都町、匹見町の2町を編入し新益田市がスタートを切ったところです。そこでまず、その新益田市について少しお時間をいただきご紹介させていただきたいと思えます。

本市は、昭和27年8月に益田町を中心に1町7か村が合併し、市制を施行いたしました。昭和30年3月には周辺5か村を編入し、そしてこの11月1日に2町を編入合併して新益田市が誕生したところです。今回の合併により、市の面積は県下で最大の約733km<sup>2</sup>になりました。北は日本海に面し、南は中国山地を抱え、広島県境まで大変広大な面積を有する市となりました。人口は約5万4,500人です。島根県は東西に長い県ですが、益田市はその最西端に位置しています。



交通面で申しますと、国道9号と国道191号が交差し、鉄道はJRの山陰本線と山口線が連結しています。そして平成5年には萩・石見空港が開港し、現在は東京便1便、大阪便1便が就航して、この島根県の西部地域、また山口県の北東地域も含めた地域の交通の要衝になっています。

地理的には北は日本海を望み、南は広島県、西は山口県に接しています。中国山地の原生林に源を發しました二つの川、高津川と益田川によって形成された三角州が益田市の中心地となっています。海、川、山と自然に恵まれた豊かな環境にあります。とりわけ高津川は水のきれいなことで全国ランキングでも7位です。ダムがない、天然アユが遡上する清流高津川ということで、人によっては日本一の清流であると言っています。

益田市の特産品としては、メロン、ブドウ、トマトなどの施設農業による産品が多く、また合併した旧匹見町では、清流に育まれたワサビ、旧美都町では柚などの農産物があります。中でもアムスメロンが県内外から非常に高い評価をいただいております、近畿、広島方面に出荷されているという状況です。水産物では、清流高津川で育った天然アユとその加工品、そして日本海ではアワビ、サザエなどの新鮮な海産物が獲れています。

観光スポットでは、まさに雪舟さんにゆかりの医光寺、萬福寺という二つのお寺があり、雪舟さんが作庭された庭園があります。雪舟さんが作庭された庭園は日本で四つか五つしかないと言われておりますが、その二つが当益田市に存在するのです。また、雪舟さんが描かれた国の重要文化財になっている「益田兼堯像」があります。この「益田兼堯像」は雪舟の郷記念館に収蔵されています。この雪舟の郷記念館では、雪舟さんにちなんださまざまな取組みをしています。今年の夏には、足でネズミの絵を描いたという雪舟さんのエピソードにちなんで、足でネズミの絵を描いてみようというワークショップを開催しました。

また、益田市は万葉の歌人、柿本人麿ともゆかりのある地です。柿本人麿は益田市で生まれ、益田市で亡くなったという伝説があります。歌道の第一人者としての名声を得たのち、石見の国府の役人として赴任し、最後は益田市の鴨山というところで辞世の歌を残して永眠したと伝えられています。先年、梅原猛先生が一生懸命この辺りの調査をされて、それをまた本に書かれたというのは皆様ご存じのとおりかと思えます。戸田と高津に柿本神社があります。そのほか柿本人麿にまつわる多くの伝承が残されているところです。益田市においては、人丸さん、人丸さんと親しまれています。また周辺には、県立の万葉公園があり、その名のとおり万葉の時代を彷彿とさせる自然豊かな公園となっています。万葉のいろいろな歌に詠み込まれた植物

がここに多種類植えてあります。

観光スポットとしては、先ほどもご紹介しましたが、美都町、匹見町と合併をしたことにより、非常に清らかな流れ、溪流を楽しむことができる匹見峡、双川峡があります。ちょうど紅葉の見ごろになっていると思います。さらに旧匹見町、旧美都町にはそれぞれ温泉があり、市内外から、また広島県辺りからもたくさんのお客さんが訪れているという状況です。

さて、本市でいま取組みが進められている主要事業としては、将来山陰自動車道の一部となる益田道路の建設が進められています。島根県は東西に長いと申しましたが、東から西へ国道9号が幹線道路として1本通っていますが、この国道9号の益田市内における渋滞解消を目的としたバイパスとしての益田道路の建設が進められているところです。そして、新しい益田市の顔としてJR益田駅前の再開発事業を一大プロジェクトとして取り組んでいます。商業施設、公益施設、マンション、駐車、駐輪場を集合した駅前再開発ビルの早期完成に向けての取組みを進めています。これに併せて、市内の中心部を横断する県道中島染羽線という延長1.7kmの直線道路の拡幅事業が進められています。

その拡幅中の道路のすぐそばに、「グラントワ」という愛称の県の芸術文化センターが着々と建設中です。来年17年の秋にはオープンということになっています。「グラントワ」というのはフランス語で「大きい屋根」という意味です。施設の内容としては、美術館とホールの複合施設です。美術館には四つの展示室と多目的ギャラリー、1500人収容の大ホールと400人収容の小ホールの二つを持つことになっています。こういう美術館とホールの併設施設としては、日本でも五本の指に入るような施設です。地域の芸術、文化活動の拠点施設として大いに期待されているところです。

益田市は非常に歴史の古いまちです。その歴史を活かして、「益田市歴史を活かしたまちづくり計画」を進めています。益田氏が400年にわたってこの地を統治していましたが、この益田氏の居館後である三宅御土居跡と、居城である七尾城跡の二つを中心とした「益田氏城館跡」が9月末に国の文化財に指定されました。この益田氏の城館跡を中心として、今後「歴史を活かしたまちづくり計画」を具体的に進めていきたいと考えています。

この益田氏が、まさに雪舟さんとの縁を益田市につくってくれたことになるわけです。雪舟さんは大変有名な方ですので各地にいろいろな伝承がありますが、1469年に中国から帰国後、1478年ごろに益田七尾城第15代城主 益田兼堯の招きにより益田を訪問されました。その時に招いてくれた益田兼堯の像を描きました。そして「山寺図」「花鳥図屏風」を描き、それらはすべて国の重要文化財に指定されています。また、雪舟さんが住職を務めた益田氏の菩提寺の医光寺、益田氏の居館跡である三宅御土居跡に近い萬福寺という二つの寺には山水庭を築いておられます。

雪舟さんはその後いったん益田の地を離れていかれますが、再度益田を訪問され、最後は大喜庵というお寺で晩年を過ごされて87歳の生涯を終えたと伝えられています。そうした意味で、益田の市民にとって雪舟さんは大変親しみのある、歴史上の人物の中ではいちばん愛着のあるお方ではないかと思っています。

故に雪舟さんにちなんだ市民の活動もいろいろあります。吉田地区のまちづくり推進協議会による「雪舟さんまつり」は毎年秋に行われています。これは子どもたちが小さいお坊さんになって練り歩くというお祭りです。また雪舟顕彰会という組織により雪舟忌法要も開催しているところです。このように雪舟さんにちなんで地域が一体となったまちづくりを進めています。そのほかに、雪舟益田美術大賞展実行委員会というのがあり、「雪舟グランプリますだ」という全国公募の美術展を2、3年に1度実施しています。これまで4度実施し、再





来年2006年の雪舟さんの500回忌に合わせて第5回展の実施に向け、準備が進められているところです。

また雪舟さんは、ご承知のように中国の寧波市にある天童寺で修行されたわけですが、この寧波市と益田市が平成3年に友好交流議定書を締結しました。以来、市民訪問団の訪中、あるいは農業や医療、スポーツや文化を通じた交流を行っています。本年は7月に寧波市から高校生を受け入れました。そして8月には本市の中学生が寧波市に訪問して、お互いにホームステイなどを通じて交流を深めました。

以上、益田市の紹介と雪舟さんとのかわりについてご報告をさせていただきました。

今日のテーマである「協働によるまちづくり」の取組みについて多少触れさせていただきたいと思います。益田市はこの11月1日に隣接の2町を編入合併し、新益田市が誕生しました。この新益田市のまちづくりは、一口に申しますと地域自治、そして住民自治を基本とした取組みをしていこうということです。もちろん、これまでの益田市も市民との協働によるまちづくりということでいろいろな取組みを進めてきましたが、新益田市においてもさらにこれを強力に進めていこうということです。

まず、地域自治を基本にしたまちづくりということで申し上げます。隣接の2町を編入合併したということで、特に自分たちの地域が大きな益田市の中に入っていくことによって衰退するのではないかとご心配をお持ちでした。そうしたご心配をもとにいろいろな議論があったわけですが、新しい益田市ができてそれまでの益田地域、美都地域、匹見地域という3地域は、それぞれ特徴を持って発展をしていこうしようではないかということになりました。そこで、編入された二つの地域については、まず従来の町役場を総合支所という形で残しました。しかも総合支所の業務としては、窓口業務だけではなく地域振興業務にも取り組むことにしたわけですが、したがって、総合支所の中には地域振興課、住民福祉課、経済課、建設課という4課を置きました。職員も38人と41人を配置し、二つの地域についてはこれまでの取組みを継承しながらさらに発展させていくため、地域においていろいろと考え、取り組んでいくことができるように、このような仕組みをつくりました。

そして地域協議会をそれぞれの地域に設置して、地域のいろいろな問題についてそこで意見を集約します。いままで町長としてお勤めだったお二人の方にそれぞれ益田市の顧問になっていただき、さらにそれぞれの地域協議会の会長になっていただいています。そして地域の皆さんの意見を集約していただき、新益田市の市政に反映させていくという仕組みをつくりました。これまでの益田、美都、匹見の3地域が、今後それぞれ特色のある発展をしていこうと取り組もうではないかということです。

もう一つ、住民自治ということについては、これまで公民館単位で住民の皆さんのために学習活動はもとより地域活動のまとめ、あるいは行政連絡事務を行っていましたが、この機能をさらに拡大して地区振興センターという形にしました。従来の益田市では14地区、そして美都地区、匹見地区はそれぞれ3地区あり、全体で20地区にそれぞれ振興センターを置いて、そこで地域の住民活動の拠点としての機能を果たしてもらおうという仕組みにしました。地域の皆さんの推薦によって選ばれた公民館長、兼地区振興センター長のもとに市役所から職員1名を派遣し、さらにその補助をする意味で嘱託員1名配置し、基本的には3人でそれぞれの地区振興センターの業務にあたるという仕組みをつくりました。

今後、このような形で地域自治、住民自治を基本とした新益田市の運営を進めていきたいということです。これはいまスタートしたばかりですから、今後の運営について市民の皆さんのお知恵をいただきながら行おうと考えています。島根県のいちばん西にある新益田市が、そういう意味で分権型の行政運営をやろうとい

う取組みについて、皆様のご支援、あるいはご助言をいただければ大変幸いです。

最後になりましたが、このサミットの開催に当たり、地元川崎町 小田町長をはじめ、大変お世話になり心からお礼を申し上げ、また温かいご歓迎をいただきましたことに厚く感謝を申し上げる次第です。今後ともこのサミットを通じて変わらぬ交流をお願い申し上げます。益田市からのご報告とさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

[小田] 牛尾市長からご報告をいただきました。ありがとうございました。次に、山口県山口市からの報告をお願いいたします。

[山口県山口市助役 渡辺純忠]

山口市助役の渡辺です。益田市から素晴らしい景色、自然、それから活気満々なこれからのまちづくりの様子をお伝えしていただいた後で非常にやりくいところですが、本日のテーマである「協働によるまちづくり」、その前に山口市の概要について説明させていただきます。

山口市は、ご案内のとおりですが山口県の中央部に位置しています。いわゆる後背部に中国山地を擁しており、前面は瀬戸内海に臨んでいます。人口は県庁所在市ということもあり、毎年1000人程度、まだ増加を続けています。現在約14万人です。しかし、47都道府県の県庁所在都市としてはいちばん人口が少



ない市です。先ほどからそれぞれの市や町で合併のお話もありましたが、山口市も合併を順調に進めています。来年の10月、またこのサミットが開催されるころには合併も済んでいると思っています。1市4町の合併を目指して、合併が整いますと19万の県庁所在都市が生まれることになっています。しかし、どこの県庁所在都市もまた合併を進めていますので、それでもまだ最下位かなと想定しています。

山口の特産品等についてお話をさせていただきます。山口市は、都市と申しましても田園都市です。どちらかという農産物、林産物に恵まれた穀倉地帯でもあります。農産物等については豊かなのですが、これといった産地形成をするようなものがないという残念なこともあります。その中で、私どもが誇っている特産品には大内塗があります。室町時代の守護職である大内氏の居城があったところが山口市でしたから、その頃からの伝統を誇る漆塗り、非常に立派な大内塗があります。また菓子類、和菓子類では外郎があります。外郎については名古屋市とかなり熾烈な争いをしています。名古屋市の外郎ももちろん立派ですが、私どもの外郎は名古屋市に勝るとも劣らない、いや、それ以上かなという自慢もしているところです。

そのほかには、戦国時代の末期、毛利が萩に城を構えますが、その毛利が朝鮮との関連の中で発展をさせた萩焼もあります。明治期以降になってきますと山口萩焼といったかたちで、またいろいろな窯も山口の中



にあります。こうしたものが主な特産品等です。しかし、いま申しました外郎にしても大内塗にしても、山口県内では名が通っているのですが、全国的かと申しますとまだまだかなと思います。これから一生懸命PRをしていかなければならない。我々が宣伝下手というものあるかなという思いもあります。

観光名所や旧跡については、雪舟の活躍した大内時代の華やいだ大内文化にゆかりのある瑠璃光寺五重塔。この五重塔も、私どもは日本一素晴らしい五重塔ではないかという自負があります。それから常栄寺の雪舟庭も素晴らしいです。また、奇しくも大内時代にフランシスコ・ザビエルが山口市を訪れて、滞在もしています。そうしたことから、山口サビエル記念聖堂があります。余談になりますが、先ほどの講演の中でもありましたが、雪舟は1506年に亡くなられた。私の記憶では1506年にフランシスコ・ザビエルは生まれていますが、非常に奇妙な因縁かなという思いもしています。もちろんザビエルは雪舟没の20年ほど後に、また山口を訪れるということです。

山口市は、明治維新という大きな変革の時を中心としております。そうしたことから明治維新のいろいろな史跡もあります。私どもが非常に重要視している十朋亭、あるいはその後明治の元勳などが訪れたと言われる旧料亭であった山口市菜香亭。これは現在は新しく移築して、当時そのままを復元し、山口市菜香亭として今年の秋前に開館したばかりです。こうした歴史にかかわる史跡もありますが、また一方で私どものところには、月面着陸したアポロのテレビ放映を覚えていらっしゃると思いますが、放映をする時に衛星中継で受信した、また日本各地に放映した巨大なパラボラアンテナも山口の衛星通信所にあります。こうした近代的なものもあります。

次に、山口と雪舟とのかかわりについてお話をしたいと思います。山口と雪舟についてお話しするときには、やはり大内氏の名を抜きには語れないところです。大内氏は周防を中心とした守護大名で、その政治の中心が山口市に置かれていました。諸説ありますが、雪舟が初めて山口に来たのは、いちばん古ければ1454～1455年、あるいはその後1458～1459年かということです。いずれにしても、いま申したような期間に雪舟が山口に来たと思われます。当時の大内家の当主は第28代の大内教弘でした。これは山口が経済的、文化的に発展する基を築いた当主でした。山口発展期であったということです。

特に大内氏の経済を支えたものの一つが対朝鮮貿易。これがかなりの経済効果を発揮しています。その次が明との勘合貿易、遣明船による貿易です。この二つの交易で巨大な富を蓄えていった。これが大内氏です。そうした大内氏の遣明船の存在が、明に渡って画の勉強をしたいという雪舟の山口へ来る一つの要因であったかもしれないと思っています。そして雪舟は念願かなって1467年に大内氏の遣明船で明に渡ります。この時の遣明船は、室町幕府が1隻、細川が1隻、そして山口大内が1隻と3隻だけで行ったと言われていいます。そしてその2年後に、足掛け3年と言っていますが日本に帰ってきました。

帰国後については、先ほど来大野町、益田市、また後ほど川崎町のご報告がありますが、川崎町では藤江氏魚楽園の庭園を作庭したり、あるいはそれから後日本各地を漂泊しながら作画、作庭を行って、また再び山口の地に戻ってきます。山口に再び戻ってきたときに1軒のアトリエ、雲谷庵を開庵しています。雲谷庵で精力的に創作活動にいそまれたということです。雪舟さんは1506年、この雲谷庵で死去されたのではなかろうかという言われています。これには諸説あるようです。

このように、雪舟が生きた大内氏の時代から500年後の現代ですが、山口市では、大内氏の時代から引き継いできた歴史や文化などを大内文化という象徴的な言葉で表しています。大内氏をもって山口県民、市民は大内文化と言っています。それに対して、維新発祥の地であったので維新文化ということがよく言われます。維新が文化を形成したのかと、この辺については諸説あるようですが、維新文化は私どもはあまり大きく

は言いません。しかし大内文化は山口で定着しています。本市のまちの性格を特徴づける要素として大内文化をどうしても生かしていきたいということで、大内文化まちづくりの取組みを進めているところです。

大内文化まちづくりを、今回のテーマである「協働によるまちづくり」の視点から少しご説明させていただきます。本市では、先ほど申しましたように大内文化まちづくりを山口市全体のまちづくりの戦略的プロジェクトとして位置づけています。そうした位置づけの過程、あるいはいま進めている過程については、市民と行政によるさまざまな検討協議がなされてきています。それを具体的に申し上げますと、平成6年に民間市議会、市職員で構成する「大内文化まちづくり懇話会」という組織を設置しました。個性ある地方の時代、大内文化を生かしたまちづくりについての提言をしていただいたのが始まりです。その後、この提言をより具体化するために平成9年に民間の有識者と市の若手職員による「大内文化まちづくり研究会」が組織され、将来の大内文化を生かしたまちづくりの姿を研究しています。

平成11年にはその研究会において「一千年の西の京」という報告書がまとめられ、市に提出いただいています。この報告書によると、大内氏が京都を模したまちづくりを行い、その香りをいまに伝える大殿地区を大内文化特定地域として設定するなど、大内文化を生かしたまちづくりについての具体的な提案がなされました。「大内文化まちづくり実行計画」を平成14年度に策定しましたが、この中の「大内まちづくり推進計画」のベースとなったものです。

これからのまちづくりを考えますと、まずまちづくりの主役はどうしても市民、ただ市民というのではなく、大内氏が文化の花を咲かせたこのまちそのものです。いわゆる町衆、そのまちに暮らしている市民と行政とがお互いの役割を認識して協働によるまちづくりを進めていく。これが非常に重要であると思っています。こうしたことから、山口市では、市民との協働によるまちづくりを進めるために、市民が積極的に市政に参加するシステムの構築に取り組んでいるところです。大内文化まちづくりの関連で言いますと、山口市指定史跡の十朋亭、そして先ほども申しました旧料亭、今度新築移築しましたが山口市菜香亭、こうしたものの活用法については民間からの積極的な提案をいただいています。こうした提案をきっかけとして、山口市菜香亭では自治法改正による指定管理者制度も導入して、公募をしてそれにふさわしいNPO法人による管理、運営が始まっているところです。

このような協働を通じた市民主体のまちづくりを考える中で、市民の企画運営から始まり、いまや秋の催しとして定着した「アートふる山口」という市民型のイベントがあります。ご紹介しますと、今回で9回目を迎えるわけですが、今年は10月2日、3日にかけて開催されました。このイベントは京に憧れた大内氏のまちづくりの香りが残る大殿地区、いわゆる居館があった周辺ですが、その地区を中心とした昔の街道沿いを中心にいまも古い建物の木造の民家や商家がありますが、それを開放してそれぞれの家が所蔵している美術品、あるいは伝統の道具等々を展示していただいたりしました。あるいは団体やグループが、山口市の歴史や文化を題材にした趣向を凝らしたイベントを行っています。まちそのもので行っているのが「アートふる山口」です。この2日間は文化、芸術をこよなく愛した大内氏、その華やいだ雰囲気がかみ全体に広がります。雪舟についても、こうした雰囲気の中で山口に根を下ろし、創作活動にいそしんだのではないかと私もは思っています。

市民主体のイベントは、その地域に残る伝統や文化を市民自らがまちづくり、まちおこしに活用している点において、まさに本市の大内文化まちづくりの具体的な実践例であります。また市民主体のまちづくりの原点



になるものと感じているところです。ぜひ山口に来られる機会がありましたら、山口の歴史や文化遺産に触れていただくと同時に、「アートふる山口」に代表されるさまざまな市民主体のまちづくりについてもご覧、ご視察をいただければ幸いに思うところです。

なお、今年は福岡で国文祭が開催されていますが、2年後の2006年には山口県において国民文化祭が開催されることになっています。2006年という年は、奇しくも雪舟没後500年という節目の年に当たります。こうしたことから、山口市を主舞台とする国民文化祭においては、山口市にある県立の美術館において大々的な雪舟展を行うことを企画、立案中です。必ず行います。全国の美術館、博物館等々で所蔵されている国宝級のものをできるだけ多く集めたい。山口には雪舟ゆかりの大内がありましたので、美術館にも国宝級の雪舟ゆかりのものがかなりあります。隣の防府市にも毛利博物館があります。ここには数々の雪舟ゆかりの文物もあります。そうしたものをすべて総覧できるような雪舟展を開催したいと思っています。

また、雪舟展と同時に、雪舟と文化維新ということテーマとしてシンポジウムも開催することとしています。先ほど申し落としましたが、山口市で市民の皆さん方が非常に熱を上げて参加していただいているものに山口市観光ボランティアというものがあります。いろいろな勉強をしながら山口市の大内地区、大内文化に訪れた、あるいは明治維新文化に訪れた方々への観光案内をボランティアでやっています。こうしたボランティア活動に携わる方々にも雪舟と文化維新のシンポジウムにいろいろとご参加をいただき、ご提案もいただき、素晴らしいシンポジウムになるように準備を念入りに行っているところです。今日は、山口市観光ボランティアの市川さんも、ぜひ見ておきたいということでここへ訪れていらっしゃいます。

2006年には国民文化祭が山口市を主舞台とした山口県で開催されます。その時には、やはりメインとなるものは雪舟です。大内文化です。どうぞ、皆さん方にもお越しいただくことをお願いいたしまして、簡単ですが説明に代えさせていただきます。第10回雪舟サミットを開催していただきました川崎町に感謝を申し上げまして、お話を終わらせていただきます。(拍手)

[小田] 渡辺助役より雪舟さん、それから大内文化、市民との協働によるまちづくりについてのご説明をいただきました。ありがとうございました。次に、岡山県芳井町からのご報告をお願いいたします。

[岡山県芳井町長 瀧本豊文]

皆さん、こんにちは。私は一昨年の平成14年5月に町長に就任しまして、今回初めて雪舟サミットに参加させていただくことになりました。岡山県後月郡芳井町長の瀧本豊文と申します。どうぞよろしく願いいたします。

早速ですが、芳井町の紹介をさせていただきます。先ほど総社市の國府助役は生っ粋の岡山弁で説明をされました。私は標準語に近い岡山弁で説明をさせていただきたいと思います。芳井町は岡山県の南西部に位置しています。岡山市から西へ約60km、西は広島県の福



山市へ隣接しています。町全体の約8割を山林が占める自然に恵まれた町です。人口は平成12年の国勢調査で6016人、1903世帯で、過疎化を課題として抱えているところです。また芳井町は、昭和29年に1町3村の合併より、本年でちょうど50周年という記念すべき年を迎えています。去る5月20日の記念式典を皮切りに、さまざまな記念行事に取り組んでいるところです。

町の自慢と申しますと、南北を流れる小田川の清流と四季が織りなす豊かな自然環境と、多くの先人が築かれた歴史と文化です。まず自然環境ですが、豊かな大地に育まれた多くの農作物が特産品として挙げられます。中でも明治ごぼうです。全国というのはオーバーかもしれませんが、最近は料理番組等々で大変いいごぼうだと扱っていただきました。そうしたPR効果もあるかもしれませんが、また佐藤前芳井町長からもこのサミットでたびたびご紹介させていただいておりました。肉質が緻密で歯ごたえがよく風味も素晴らしいと、ありがたい評価をいただいています。

このごぼうを利用して新たな特産品を開発できないかということで、平成15年7月には明治ごぼうを使ったリキュール酒を開発し、販売を進めています。ごぼうの酒は米エキス入りのものと唐辛子入りの2種類あります。会場の皆さんにご賞味いただきたく持って来たかったのですが、手荷物が重たかったので少しだけお持ちしました。これは町内の酒屋さんしか扱っていません。限定販売です。早い者勝ちですので、よろしければ役場にご連絡をいただければ調達に協力したいと思っていますので、よろしく願いいたします。これが地域活性化の起爆剤になればと大いに期待をしています。

また、大粒ブドウのニューピオーネの生産にも昭和61年より取り組んでいるところです。現在生産農家は24戸で、7.5haの栽培面積です。規模とすれば零細ですが、これも自慢で申し上げますが、芳井町のピオーネは岡山県内でも着色、食味とも高品質で、ごぼうと同様に市場からも高い評価を得ています。出荷は東は近畿、西は九州までしておりますので、これを味わった方もいらっしゃるかと思います。ごぼうと併せてニューピオーネもよろしくお願いしたいと思います。

続いて、歴史と文化です。まず雪舟とのかかわりですが、雪舟の生涯は多くの謎に包まれており、終焉の地についても山口市の渡辺助役のお話にもありました。益田市の牛尾市長のお話にもありましたとおり、益田市、そして山口市などの説があります。『東福寺誌』等の文献によりますと、雪舟は1506年に芳井町にある重玄寺で没したと伝えられています。重玄寺は1441年、千畝周竹和尚によって開かれた臨済宗仏通寺派の禅寺です。ここは昭和30年の火災により全焼したために、焼け残った鐘桜門と石門を移築し再建されています。現在は跡地が残るだけとなっています。平成8年には、その千畝和尚の語録『也足外集』に雪舟の一族と思われる人物の名前が記されていることが分かり、専門家から注目されたところです。

また、戦中戦後を通じて日中友好にその生涯を捧げた内山完造や、幕末期に漢学塾を開き人材育成に努めた阪谷朗廬など数多くの先人が素晴らしい遺産を私たちに残してくれています。これら町内の素晴らしい歴史遺産を後世に伝えようと、町内有志により、私を会長に「芳井町先人顕彰会」を昨年の10月に発足しました。そして今年8月には内山先生ゆかりの地である中国の上海市を訪問し、日中交流をして友好関係を深めてきたところです。また明後日計画しているのですが、町のふるさと祭りでは雪舟のパネル展をするなど活発に顕彰活動をしています。

さて、先ほど来お話もありました市町村合併の問題です。本町においては、私が町長就任以来政治の信条として掲げましたことは、町政は町民のためにあるということです。この公約に基づいて、町民の声を聞きた



めの町民まちづくり会議室を、町内21地区自治会がありますが、その自治会単位で開催し、合併についての説明をさせていただき、町民からのご意見を伺ったところです。また平成14年10月に行ったアンケート調査においても、市町村合併に賛成という声が多く寄せられました。私どもの町においては歴史的、地理的面から考えて、隣にある井原市を除いた合併は考えられないということから、昨年2月に井原市へ合併研究会の設置を申し入れさせていただきました。この4月に井原市、芳井町、そして同じ隣接している美星町の1市2町による合併研究会を立ち上げ、調査、研究を進めてまいりました。昨年9月には法定協議会である井原地域合併協議会を発足させ、合併協議を進めてまいりました。

そして今年8月に協議も整ったことから、1市2町による合併協定書への調印、10月には岡山県知事への合併認可の申請をしまして、来年3月1日の新市誕生に向けて取組みを進めています。合併すれば人口4万6000人の市となります。また1市2町の新市建設計画では、新井原市を三つのゾーンに分け、本町は自然、文化を生かした健康づくりやレクリエーションが行われる癒し型の交流エリアとしての発展方向が示されています。次世代の人たちが夢や希望を持って安心して暮らせることを第一に考えて作成したところです。なお、この井原地域合併協議会の中で、雪舟サミットへの参加は新市である井原市が現行のまま引き継ぐという承認をいただいております。合併が成就した暁には、新自治体「井原市」としての参加を皆様方にお認めいただきますことをお願いします。

次に「協働によるまちづくり」についてです。現在、芳井町では高齢化率34.6%という数字を抱える中、健康寿命日本一のまちづくりをキャッチフレーズに健康増進福祉施設の建設を、合併前になりますが来年2月の完成を目指して進めています。高齢化の進展や疾病構造の変化から、国でも2000年4月から21世紀における国民健康づくり運動「健康日本21」をスタートさせ、昨年5月からは健康増進法を施行するなど国民の健康に対する施策を行っています。本町においても、これらに沿いながら保健センターを中心に各種検診の実施、健康教育に取り組んでいます。

基本健康審査で一般に生活習慣病と言われる糖尿病や高脂血症、肥満症、高血圧などと判定される受診者は増加傾向にあります。また寝たきりや痴呆といった加齢に伴う障害も増加してきています。このような状況の中で健康寿命、健康で明るく生活し、実り豊かで満足できる生涯、つまり痴呆や寝たきりにならない状態で生活できる期間のことですが、この健康寿命の延伸を目的に計画したのが、温水プール、マシンを備えたトレーニングルーム、スタジオなどを併設した健康増進福祉施設の建設です。この施設をより住民ニーズに合ったものにするために、議会、医療、自治会、体育協会の方々10名による健康増進福祉施設の建設計画策定審議会、その下部組織として町内の医療、学校、スポーツ少年団、そして健康運動実践者などで編成した18名のワーキンググループを設置して、広く意見を求めながら検討を重ね、建設計画を作成しました。施設整備の目的として掲げたことは、次のとおりです。

まず一点目は、地域住民の健康づくりということです。健康を維持するために必要な運動の質、量を確保することが個人の努力だけでは困難となっていることは否めないわけですが、そこで地域住民の運動習慣確立のための啓蒙、実践事業を展開して、生活習慣病、介護、寝たきりの予防につなげることです。また地域住民参加型の健康づくり運動を展開することにより、健康に対する意識の改善を図ることもつながると考えます。

二点目は、地域住民のQOL、つまり生活の質の向上ということです。この施設を、地域住民の方々が自分自身が満足していると感じることができるサポート施設として機能させることです。

三点目は、健康運動実践の効果により、生活習慣病等に伴う医療費、寝たきりに伴う介護費などの地方財政への負担軽減を図ることです。

四点目は、幼児、児童、生徒の水泳技術の向上、体力づくりを図るとともに、学区を越えた児童、生徒間の交流の促進を図ることです。

最後に五点目ですが、プールを利用した歩行訓練等を行うことにより機能回復を図るということです。

なお、この施設の管理運営については、先ほど山口市の渡辺助役も触れられましたが、公の施設の管理に民間の能力を活用しながら住民サービスの向上を図ることを目的に、昨年9月に創設された指定管理者制度により行うこととしています。またこの施設の愛称については、広報紙、ホームページ上で募集させていただきました。100通を超える応募の中から選ばれた愛称は「ASUWA」です。この選定理由としては、平安時代の資料によると本町及び合併先の井原市に広がっていた地名、足次(あすわ)郷に通じていること。それから、明日は今日よりもっと元気になろうという、将来にわたって地域住民の健康づくりを進めていくという願いがイメージできること。そして発音が覚えやすく親しみやすいということでした。健康は活力あるまちづくりの基本です。この愛称に込められた願いです。明日は今日よりもっと元気になろうという地域住民の輪が大きく広がり、健康増進の中核的施設として留まらず、健康寿命日本一を目指すまちづくりの拠点施設となることを私どもは期待しているところです。

終わりに、今回雪舟サミットの会場として大変お世話になります川崎町の小田町長をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、今回のサミットにご参会の皆様方の交流がさらに深まり実り多い会となりますこと、そして各市町のますますのご発展を祈念いたしまして、私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

[小田] 瀧本町長よりご報告をいただきました。次回、第11回サミットには井原市として参加する可能性がある、それからごぼうのお酒が大変健康的でおいしいということです。川崎町でも注文を受けますので、どうぞたくさんの注文をしていただきたいと思います。

最後になりましたが、川崎町から報告をさせていただきます。

川崎町は福岡県のほぼ中央にあります。福岡市と北九州市のほぼ中間にある筑豊地域の中でやや南よりに位置し、東西4.9km、南北で12.6km、総面積が36.12km<sup>2</sup>と南北に長い地形をしています。川崎町の人口については、石炭産業最盛期の昭和30年ごろは4万人を超していました。それをピークに減少に転じて、現在では人口2万1000人、世帯数で9500世帯となっています。かつては大小多くの炭鉱を有する石炭産業の町でしたが、エネルギー革命による石炭産業の衰退後は豊かな自然に囲まれた特性を生かし、農業を中心に自然と共生し活力ある産業のまちづくりを進めています。

その他の産業では、ベルギーで開催されているモンドセレクション、いわゆる食品のノーベル賞で金賞を受賞した「マルボシ酢」や、多数の店舗を有するスーパーマーケットの本社等があります。そして国道322号線沿いには多くの小売店舗の進出が目立っています。非公共投資産業の振興も大きな広がりを見せています。

特産品については、近年では消費者の自然志向による産地直産品の期待感からイチゴ、梨、ブドウをはじめとした特産品の開発も盛んに行われています。この果物をはじめ、地元で採れた新鮮で安全な食材を提





供しようと今年4月、川崎町農産物直売所「De・愛」がオープンしました。体にやさしく、おいしく、しかも安価であることから、町内外から多くの皆さんが連日買い物にいられています。また、川崎町の農村女性たちがJA田川、川崎町農産加工部会を組織しており、自分の子どもや孫に食べさせるつもりで地場産の安全な素材にこだわり農産加工品を製造、販売しています。中でも、古代米として注目されている赤米を使った赤米チップはヒット商品となっています。この赤米チップやみそ、梅干、ゆずこしょうなどを詰め合わせた「ふるさと便」はお中元やお歳暮、ご進物などに大変好評を得ています。本日のサミット終了後に、先ほど紹介しました川崎町農産物直売所「De・愛」にご案内いたしますが、その直売所においても販売をされておりますので、ぜひ商品をご覧ください、できれば購入をお願いしたいと思います。



観光名所ですが、とても自然に恵まれた土地であることを先ほど紹介しましたが、まちの最高峰戸谷ヶ岳のふもと、標高400mにあります「戸谷自然ふれあいの森・キャンプ場」は、夏休みになりますと町内はもとより県外からたくさんのお客様がお見えになります。毎年お越しになる常連さんも多く、川崎町の自然を満喫してリフレッシュして帰っているようです。また同じ戸谷自然ふれあいの森にはオーナー制りんご園、本格的ログハウスの戸谷山荘などもあります。このほかにも、町内には15種類のお風呂やウォータースライダー付プールなどで楽しめる温泉付帯レジャー施設「英彦山湯～遊～共和国」、農村や都市との架け橋を目指す「ラビュタファーム」などがあります。ここではキャンプやブドウ、梨狩りができるほか、地元の食材をふんだんに使ったレストランやパン工房があります。マスコミにも登場したことから連日多くの観光客でにぎわっているようです。

次にまちづくりの方針ですが、21世紀初頭の今日、地方分権の進展や行財政、経済、社会の構造改革、少子高齢化の進行や地球環境問題への意識の高まり、さらにはIT化によるグローバル化のさらなる進展等、地方を取り巻く環境が大きな転換期を迎えております。このような情勢の中、川崎町の未来に向けたまちづくりの目標として「生きがい、ふれあい、安心のまち」を基本コンセプトに、「人にやさしい健康と福祉のまちづくり」、「心豊かな教育文化のまちづくり」、「活力ある産業のまちづくり」、「自然と共生したまちづくり」、「豊かで夢を持てるまちづくり」を施策構想の基本目標として、新たな川崎町づくりを目指しています。

地域経済の振興については、石炭産業衰退以降、地域経済の振興を図るべく基幹道路や企業誘致のための工業団地の整備をはじめとしたさまざまな基盤整備を行ってまいりました。しかし全国的な景気低迷、産業の国際化等による空洞化、流通改革に伴う輸入農産物の増加等により、本町を取り巻く経済環境は極めて厳しい状況にあります。このような情勢の中、地域経済の浮揚、雇用の確保については、工業団地への新規進出企業の誘致を積極的に行うとともに、既存企業が開発する食品開発や生産への支援、新産業の芽を育む企業が進出しやすい環境づくりを進めています。

また農業、観光分野では、消費者に受け入れられる作物の生産や、競争力のある「メイドイン川崎」のブランド化への開発、生産支援、販路拡大に向けたPR活動等、「つくる農業からうる農業」への転換や、本町の自然環境、名勝、文化財、公共観光施設、民間の温泉付帯レジャー施設、農家レストラン等、多くの観光客が訪

れています。今後は福岡、北九州都市圏から約1時間という立地を生かした日帰り観光ルートと民間観光施設との相互連携を図り、官民一体となって都市への情報発信を積極的に行い、「都市と農村との交流促進」を図ることで新たなまちづくりへの発展へつなげようとしているところです。

川崎町の財政状況については非常に厳しく、町職員をはじめ、町民の皆さんのご理解をいただきながら事務事業の見直し、組織機構の簡素、効率化、定員管理などの推進を計画的に進めています。平成13年度からこのような自主再建を実施しており、平成17年度末での累積赤字の解消を図るべく積極的に取り組んでいるところです。またその成果は着実に見る事ができています。

雪舟さんとのかわり、またゆかりの地についてです。川崎町の荒平地区に画聖 雪舟が築庭した国指定名勝庭園「藤江氏魚楽園」があります。ここは藤江家の庭園で、奥座敷から池を鑑賞することができ、背後には自然の山を取り入れているため池の周りを回遊することができます。また中島や石橋もあり、立石を配置した中世の枯山水の様式を整えています。このように、この庭園は自然の庭の一部となっているため、春は目に優しい新緑、秋は燃えるような紅葉、冬は幻想的な雪景色、一年を通じて美しい景色で私たちを楽しませてくれます。特に秋の紅葉は素晴らしく、現実からかけ離れた雅やかな世界へと誘ってくれます。魚楽園という名前の由来ですが、仏教の経文の中の「魚楽しければ、人また楽し」という文章から名づけられたと言われ、人も魚も鳥もすべてが大自然の中に調和し溶け込んだ桃源郷を意味しています。この素晴らしい魚楽園をまちづくりの起爆剤として位置づけ、現在さまざまな取り組みを行っています。

まちづくりへの活用ですが、まず平成12年度から隔年で中国から女流画家をお招きし、日中交流水墨画公募展を開催しています。雪舟サミット関係市町の皆さんにも毎回ご協力いただいておりますし、誠に感謝を申し上げます。今年は第19回国民文化祭・ふくおか2004とびうめ国文祭と合わせて明日から9日間開催します。この公募展で特に好評を得ているのは、画家たちが私たちの目の前でさらさらと水墨画を描く実演会、揮毫会です。揮毫会会場には、めったに見ることのない画家たちの筆さばきを一目見ようと大勢の見学者がおいでになります。今回も8名の中国女流画家が私たちの目を癒してくれることと期待しています。皆さんも明日の水墨画公募展開会をどうぞお楽しみいただきたいと思います。今回の公募展は、川崎町をはじめ全国から432点もの大変見ごたえのある作品ばかりが応募されています。回を重ねるごとに水墨画の町としての認知度を高めていこうと努力しているところです。

また民間団体の取り組みですが、町民の中から雪舟さんの魚楽園を支援する団体「雪舟さんの魚楽園顕彰会」が平成12年に設立され、町内外の会員が魚楽園を中心にさまざまな活動をしています。その一つとして、秋の紅葉が美しくなる11月には雪舟さんの紅葉祭りが開催されます。今年は5回目となり、明後日11月7日から開催されます。その紅葉祭りのイベントとして、子どもたちによるちびっ子水墨画展があります。町内外から毎回300点を超える応募があります。大人顔負けの作品が展覧されており、次の雪舟さんが誕生するのではないかと期待しています。そのほかにも野点や特産品販売など、さまざまなイベントがあります。町内外から終日家族連れの多くの方でにぎわっています。

雪舟ゆかりの川崎町として、まちづくりは住民とともに考え、行動する。「住民との連携と協働」を基本に、町民の皆さんとともに手を取り合い、知恵を出し合いながら雪舟さんの魚楽園を中心としたまちづくり活動を行っていきたいと思っています。以上です。(拍手)